

大政紀要

第七十一卷

一函	架	九六冊	一〇類
----	---	-----	-----

編下要紀政大
全法
卷五第
関校草起
村岡良弼

国立公文書館
分類
2 A
排架番号 33-5
① 70

70

大政紀要下編

法令五

詞訟

大權ノ武門ニ移ルヤ。問注所ヲ建テ。執事、
評定、引付ヲ置キ。以テ聽訟折獄ヲ掌リ。越
訴奉行アリ。以テ控訴ヲ覆問ス。是レ鎌倉
ノ制ナリ。室町以後。相訟リ相襲キ。以テ江
戸ニ造ル。江戸法廳ノ制。聽訟ノ法。之ヲ前
代ニ比スレハ。頗ル詳密ヲ加フル者アリ。

科條類典ニ視テ知ル可シ。大政復古ノ初、
 鞫獄司ヲ刑法官ニ置キ、刑部省ヲ復スル
 ニ及テ、判事解部ノ官ヲ置キ、民部ニ聽訟
 司アリ。地方ニ聽訟課アリ。以テ争訟ヲ問
 窮ス。然ルニ百事草創ニ屬シ。告訴ノ法、判
 理ノ制、未タ釐正ニ違アラズ。一ニ舊來ノ
 慣^例ニ從ヒ、奸ヲ照シ良ヲ扶ケ、以テ民情ヲ
 款服スルニ期ス。尋テ准判規程、聽訟規則
 ヲ定メ、訴答文例、控訴畧則ヲ頒テ、司法省
 ヲ建テ、天下ノ法憲ヲ統一スルニ及テ、裁

判所ヲ各府各縣ニ布キ、初メテ聽訟斷獄
 ノ課ヲ分チ、代書人ヲ置キ、以テ詞狀ニ遺
 漏ナカラシメ、代言人ヲ設ケ、代テ情ヲ陳
 一、以テ冤枉ナカラシメ、檢事ノ官ヲ置キ、
 以テ判斷ノ當否ヲ監シ、斯民ノ權利ヲ保
 持ス。更ニ大審院ヲ建テ、覆審院ヲ開キ、益
 控訴上告ノ權ヲ鞏ノ。官民相訴ルノ法ヲ
 定メ、以テ屢制抑屈ノ弊ヲ破リ、審理局ヲ
 置キ、以テ地方官、其代議士ト、法令ノ解ヲ
 異ニスル者ヲ判ス。告訴審判ノ制、是ニ於

テヤ粗備ハル、乃チ事ノ詞訟ニ関スル者
ヲ叙スル。左ノ如シ。

慶應三年十月、政權上ニ帰ス。初ノ幕府町奉行所
ヲ京都ニ置キ、供御地及ヒ宮堂上、采地ノ人民
ノ争訟ヲ審判ス。是ニ至テ、篠山、龜山、膳所、三藩
ヲ以テ、京都市中取締ト為シ、詞訟以下、假ニ三
藩ニ委シテ起分セシム。因テ廳ヲ舊町奉行邨
ニ置ク。十二月令シテ曰ク、凡ソ訴訟及ヒ請願
ノ事、必ス本管ノ官司ニ由リ、官人武家ノ臣隸
ニ囑託スル勿レ。

市中取締役所
ヲ置キ、仮ニ詞
訟ヲ判ス

理區ヲ設ク

明治元年正月、太政官ニ刑法科ヲ置キ、尋テ刑法
事務局ト為ス。乃チ令シテ曰ク、太政一新、國家
多事、撫民ノ道、未タ洽カラサル者アリ。苟モ民
ニ不便アル、告訴ニ憚ル勿レ。領主地頭ノ壟蔽
ヲ為ス者ハ、自ラ來テ訴ルヲ許スト。七百餘年
ノ壓制、一朝ニシテ革除ス。偉ナリト謂フ可キ
ナリ。因テ投訴區ヲ京都三條橋ニ置キ、辨事之
ヲ管ス。相踵テ各所ニ増置シ、終ニ府藩縣ニ及
ブ。三月、宮堂上等ノ名稱ヲ冒シテ、金銀ヲ貸與
所謂名スルヲ禁ス。尋テ令シテ、此禁ヲ口ニ藉

大政綱要 編

市政裁判所ヲ
江戸ニ置ク

キ其辨償ヲ拒ムヲ得サラシム。閏四月、官制ヲ更ノ。刑法事務局ヲ以テ。刑法官ト為シ。鞫獄司ヲ置キ。以テ聽訟斷獄ヲ專當ス。五月、南北市政裁判所ヲ江戸ニ置キ。府下ノ訟獄ヲ聽斷ス。後テ東京府ヲ建ルニ至テ。之ヲ本府ニ併ス。七月、越後口總督嘉彰親王、埋匭ヲ軍門ニ置キ。庶民ノ訴狀ヲ受ク。軍門猶然リ。况ヤ其他ノ官衙ヲヤ。十月、刑法官ヲ東京ニ假設ス。車駕東幸ヲ以テナリ。十二月令ス。訴訟ノ決シ難キ者、府縣ノ添書ヲ以テ。之ヲ行政官ニ訴フ。以後、事ノ租稅

他管交渉訴訟
ノ審判規程ヲ
定ム

ニ関スル者ハ會計官、刑法、神祇等、各其承行ノ官ニ告訴セヨ。其府藩縣ニ交渉スル者ハ、本管ノ官司、太政官ニ稟シテ之ヲ裁ス。是年、東京府、他管交渉訴訟審判規程ヲ定ム。要ニ曰ク。府民ノ他管人ヲ告ル者、審糾シテ理アリト為ス者ハ、被告ノ管司ニ移書シテ推問セシメ。其甘結ヲ得サル者ハ、添書ヲ付シテ。會計官ニ告訴セシム。

二年二月、會計官令シテ曰ク。去年埋匭ヲ置シヨリ。建白訴狀ノ府縣ニ關スル者、之ヲ本管ニ付

ス。然ルニ其取捨如何ヲ稟セス。甚々盛旨ニ悖
 ル。受理却下ヲ條別シテ。速ニ本官ニ申セヨ。三
 月。府縣ニ令シテ。従前ノ聽訟處分ヲ具上セシ
 ム。四月。民部官ヲ置キ。五司ヲ管ス。聽訟其一ニ
 居ル。乃テ令シテ曰ク。山林田土。及ヒ金穀ノ訴
 訟。府藩縣措置ヲ異ニスル者アリト。大ニ民心
 ヲ生ヒンヲ恐ル。因テ法典制定ニ至ルマテ。務
 メテ舊法ニ因仍シ。其改メサル可ラサル者ハ。
 逐一本官ニ稟議ス可シ。七月。官制ヲ更革シ。刑
 法官ヲ改メテ。刑部省ト為シ。判事解部ヲ置キ。

民部官ニ聽訟
司ヲ置ク

聽訟ノ法務ノ
テ旧貫ニ因ラ
シム

刑部判事解部
ヲ置ク

以テ争訟ヲ問窮セシム。是年。民部省令ス。凡ソ
 争訟スル者。原告被告ヲ問ハス。召喚ノ期ニ後
 ル。者ハ。過料錢三貫ヲ科シ。病ト稱シテ至ラ
 サル者ハ。五貫ヲ科ス。差添人扶同スル者ハ。本
 人ノ例ニ照シテ。各二貫ヲ減ス。尋テ東京府モ。亦
 出廷時限ヲ定メ。訴所ニ帳簿ヲ置キ。姓名ヲ自
 署セシメ。期ヲ愆ツ者ハ。テアホ 桎鎖若クハ責付ヲ命
 ス。

三年正月令ス。凡ソ舊幕士采地ノ郷印ヲ用テ。貸

與セシ金穀証文謂郷印ノ訴訟ハ。而造相和シテ

ツ 准判規程ヲ頒

辨償ス可シト。七月、民部大藏二省ヲ復シ、聽訟
 司ヲ民部ニ隸ス。尋テ聽訟掛ト為シ、庶務司之
 ヲ管ス。明年八月、其事ヲ擧テ、司法省ニ屬ス。
 閏十月、凡ソ物品價金延滞ノ詞訟ハ、必ス憑証
 ト為ス可キ帳簿ヲ携帶セシメ、抄録ヲ以テ證
 據ト為スヲ禁ス。明年六月ニ至リ、申ネテ原告
 ノ帳簿ニ、被告ノ印證ナキ者ハ、十年内ニ係ル
 ト雖モ、受理セサルヲ令ス。是月、彈正臺、其理匱
 ヲ廢シ、冤罪及ヒ枉斷ニ遭フ者ハ、自ラ來テ告
 訴スルヲ許ス。十一月、舊制、府藩縣交渉ノ訴訟

ハ、民部省ニ致シテ判理ス。是ニ至テ、其准判規
 程ヲ頒ツ。要ニ曰ク、凡ソ訴訟ヲ為スハ、本人ニ
 限ル。若シ疾病老幼等、代人ヲ請フ者ハ、之ヲ許
 ス。凡ソ詞狀、士族卒ハ、シカシ管長、平民ハ、ナシ里正ノ証印
 ヲ受ク可シ。証印ナキ者ハ、理アリト雖モ、准理
 セス。但シ私ヲ挾テ壅塞スル者ハ、此限ニ在ラ
 ス。凡ソ治下ノ士民、他管人ト詞訟ヲ生スル時
 ハ、知事參事親シク推問シ、理アル者ハ、ハ添書ヲ
 作リ廳印ヲ踏シ、原告人ニ付シ、被告ノ管廳ニ
 移シテ、判理ヲ受ケシム。凡ソ管廳ノ添書ヲ以

テ。我判理ヲ請フ者ハ。先ツ訴状ヲ按覆シ。訴人
ヲ推問シ。情ヲ得ルニ及テ。被告、及ヒ差添人、里
正ヲ召シ。十日内ヲ限リ。答状ヲ呈セシム。限内
ニ解訟ヲ請フ者ハ。兩造連署ノ解由ヲ取リ。原
告ノ管廳ニ回付ス。凡ソ答状、詞状ニ乖戾スル
者ハ。其事由ヲ具セシメ。管長、里正之ニ証印シ。
差添人、若クハ里正ヲ副テ。原告ノ管廳ニ移ス。
凡ソ聴訟、初次ハ知事參事之ヲ審シ。承行ノ属
之ニ陪ス。第二次後ハ。属官之ヲ聽ク。若シ事重
大ニ涉リ。或ハ重罪ニ至ル可キ者ハ。知事參事。

再三之ヲ糾ス。凡ソ訴訟ヲ判決スル。兩造連署
ノ服辨ヲ取リ。異論ナキヲ証セシメ。謄本ヲ原
告ノ管廳ニ送ル。凡ソ詞訟、百日ヲ經テ。事理盤
錯。兩情乖戾シテ。甘結シ難キ者ハ。其始末ヲ具
シ。原被兩告ニ付シ。謬誤ナキヲ証セシメ。且ツ
廳印ヲ踏シ。民部省ノ裁断ヲ請ハシム。其民部
ニ移スノ命ヲ受ル者ハ。十五日内ヲ以テ。上述
ノ期ト為ス。違フ者ハ罰アリ。若シ期内ニ解訟
スル者ハ。上ノ例ニ依ル。凡ソ堤防及ヒ村市山
林疆界ノ争訟。彼此犬牙地ニ關スル者ハ。原告

ノ管廳ヲ主ト為シ。詞狀ニ廳印ヲ踏シ。関涉ノ
 廳ニ移ス。其知事參事ハ。被告及ヒ里正ヲ喚問
 シテ。答狀ヲ作ラシメ。情狀証据ヲ推糾シ。事理
 至當ナル者ハ。屬官ヲ副テ原告ノ管廳ニ送リ。
 訟庭ニ臨ミ。共ニ地圖ヲ檢シ。券契ヲ照シ。簿冊
 ヲ閱シ。實地ヲ踏ミ。協同審判ス可シ。其判決ニ
 至レハ。断案ヲ民部省ニ申禀ス可シ。凡ソ隄防
 及ヒ既渠等ハ。水利ヲ檢核シ。彼我害ナキ者ハ。
 勸諭シテ和解セシム可シト雖モ。疆界論地ニ
 至テハ。極ノテ詳密審断シ。必ス和解ヲ許ス勿

レ。凡ソ典當地ノ争訟ハ。其管廳之ヲ裁決ス。故
 ニ原告土地俱ニ我管内ニ屬スレハ。他ノ被告
 ヲ任シ。原告我管民ニシテ。土地他管ニ屬スレ
 ハ。被告ノ廳ニ移シテ。裁判ヲ受ケシム。凡ソ已
 ニ裁断ヲ經ルト雖モ。訟者再訴スル所ノ証据
 ニ照シ。前裁判其當ヲ得サル者ハ。民部省ニ禀
 シテ。覆審ヲ為ス可シ。凡ソ他管人其僑寓地ノ
 士民ト。争論ヲ生シ。直ニ其地ノ廳裁ヲ請ント
 シテ。旅店主人又ハ其地ノ親屬ヲ。差添人ト為
 シテ告訴スル者ハ。之ヲ准理シ。判決ノ後。其始

未ヲ訟者ノ管廳ニ牒ス。其僑寓人互ニ争訟ス
ルモ、亦之ニ準ス。凡ソ訴訟、未決内ニ亡命スル
者ハ、管廳ニ移書シ、百日ヲ限リテ搜索セシム。
凡ソ詞訟ノ原委、管廳ノ官吏ニ連及シテ、裁断
シ難キ者ハ、民部省ニ移ス可シ。十二月、新律綱
領ヲ頒ツ、訴訟、受賄ノ二篇アリ。曰ク、凡ソ詞訟
スルニ、本管ノ官司ニ由ラス、輒ク上司ニ越訴
スル者ハ、實ヲ得ルト雖モ笞三十、本管ノ官司
受理セス。及ヒ枉断スル者ハ、上司ニ陳告スル
ヲ許ス。若シ理匱ニ文書ヲ投シ、事ヲ申訴シテ

新律ヲ頒テ
訟律ヲ定ム

實ナラサル者ハ杖七十。事重キ者ハ、誣告律ニ
ニ依テ論ス。官司告ヲ受ケ、即時ニ受理セサル
者ハ杖七十。財ヲ受ル者ハ、枉法ヲ以テ論ス。官
吏訴人ト相識ル、並ニ回避ス可シ。違フ者ハ笞
三十。詞訟ヲ教唆シ、及ヒ人ノ為メニ詞状ヲ作
リ、情罪ヲ増減スル者ハ、犯人ト罪同シ。官吏争
訟ノ事アル、家人代テ官ニ告ク、自ラ公文ヲ以
テ、行移スルヲ得ス。其他、枉法ノ事ニ因テ、財ヲ
受ル者、及ヒ説事過錢シ、事後財ヲ受ケ、若クハ
財物ヲ求索シ、財ヲ以テ請求スル等ノ罪ヲ揭

ケ。以テ詞訟ニ奸濫ナカラシム。是月。開港場地
方官ニ令シ。商賈ノ貿易。必ス証書ヲ交換セシ
ノ。又之ヲ外國人ニ諭ス。

四年正月。金銀ノ利子。舊幕府定ムル所。本金二十
五兩ニ。利子一分ノ制限ヲ廢シ。貸借者ノ酌議
ニ隨ヒ。其分數ヲ證券ニ記載セシム。後六年ニ
至リ。金穀ノ訴訟。其證券ニ利子ノ數目ヲ載サ
ル者。原額百分ノ六ヲ以テ率ト為スコトヲ布
告ス。尋テ十年ニ至テ。利足ヲ二種ト為シ。契約
ノ利足。法律ノ利足ト曰フ。契約ノ利ハ。人民互

越訴函訴准判
規程ヲ定ム

ニ相定ムル者。一年元金百分ノ二十以下。十二
以上ニ至リ。法律ノ利ハ。裁判官。判理ニ臨テ定
ムル者。概シテ百分ノ六ト為ス。是月。民部省。越
訴函訴准判規程ヲ頒ツ。曰ク。凡ソ詞訟スルニ。
本管ノ官司ニ由ラスシテ。越訴スル者ハ。其管
廳ニ交シテ刑ニ伏セシム。若シ官吏故ナクシ
テ受理セス。及ヒ枉断スル者ハ。當該官吏ヲ召
喚シ。承告不理律ニ問フ可キ者ハ。刑部ニ移シ
テ處断ス。理匭ニ投スル所ノ詞狀。姓名印署ナ
キ者ハ。燒弃シ。名印アルハ。匭前ニ貼示シ。三十

身代限ノ法

日肉ニ。自ラ出廷セシム。蓋シ新律ヲ敷衍セル
 ナリ。五月。鳥羽藩言ス。舊政府ノ律ニ。負債完償
 ノカナキ者ハ。家資器財ヲ竭シテ。其償ニ充ル
 ノ法アリ。稱シテ身代限ト曰フ。今日猶ホ之ヲ
 援引スルヲ得ヘキヤ。批シテ之ヲ允ス。六月。全
 國ノ理匭ヲ撤ス。曰テ令ス。上疏建白等。自今集
 議院又ハ各地方廳ニ呈セヨト。七月。刑部省ヲ
 廢シテ。司法省ヲ置キ。以テ法律ヲ統一ス。乃チ
 裁判所ヲ全國ニ布設セサル可ラス。先ツ東京
 府廳ニ。司法分衙ヲ置キ。判事解部ヲ差シテ。聽

司法省ヲ置キ
全國ノ訴訟ヲ
總判ス

内外交渉訴訟
ノ制

訟ヲ掌ラシム。八月。内外國人交渉ノ訴訟。外務
 省ノ廳分ニ屬スルノ制ヲ改メテ。司法省ニ委
 ス。尋テ外國人ノ舊藩債出訴取扱規則ヲ定メ。
 外務省詞狀ヲ受ケテ。司法省ニ致シ。其争訟ニ
 至ラサル者ハ。外務省直ニ大藏省ニ致シテ。償
 還セシム。曰テ大藏ニ判理局ヲ置ク。後七年。局
 ヲ廢スルニ至リ。其簿書ヲ司法省ニ致ス。九月。
 賣買約定書式ヲ定ム。蓋シ紛争ヲ防キ。兼テ奸
 詐ヲ杜クナリ。又令ス。凡ソ詞訟。他ノ府縣廳ニ
 對スル者ハ。本管官司ノ添書ヲ請ヒ。司法省ニ

告訴ス可シ。人民ノ詞訟ハ、仍ホ準判規程ニ據ル。十一月令シテ曰ク。凡ソ金穀ヲ舊藩ニ貸與スル者、其年月、及ヒ償還ノ期限、利子ノ分數等ヲ詳記シ、証書ノ謄本ヲ併セ、三十日以内ヲ限リ、大藏省ニ上レ。其期ヲ過クル者ハ受理セズ。是月、外務省、外國公使ニ牒ス。司法判事本多高門ヲ、築地運上所ニ直セシメ、内外交渉ノ詞訟ヲ審理ス。事詞訟ニ関セサル者ハ、舊ニ仍テ東京府之ヲ知ル。明年二月ニ至リ、運上所ヲ改メテ、東京開市場裁判所ト稱シ。司法省ニ属ス。十二

開市場裁判所ヲ設ク

東京裁判所ヲ置キ始テ聽訟課ヲ分ツ

月、凡ソ争訟、國郡村里、及ヒ田畝山林ノ疆界ニ係ル者ハ、解部及ヒ大藏官吏、會同檢踏ノ制ヲ定メ、其判文及ヒ地圖ニ、承行官吏、連署押印シ、事大ナル者ハ、更ニ司法省印ヲ踏シ、事小ナル者ハ、裁判所印ヲ踏シ、永ク証據ト為サシム。是月、東京裁判所ヲ司法省ニ置キ、始メテ聽訟課ヲ分ツ。曰テ府廳ノ司法分衙ヲ撤ス。五年二月、土地賣買ノ禁ヲ解キ、土地抵當典當規則ヲ定ム。又清國上海ニ領事官ヲ置キ、彼我交渉ノ訴訟ヲ判理セシム。三月、藩債證書中、往々

聽訟規則ヲ定

偽造詐欺アルヲ以テ、令シテ之ヲ嚴飭シ、其錯
 誤ニ係ル者ハ、自首スルヲ許ス。是月、聽訟規則
 ヲ頒ツ。司法省ノ疏ニ曰ク、聽訟ノ法、府縣各舊
 貫ヲ襲ヒ、未タ一定ノ制アラズ。先ツ原告條例、
 被告條例ヲ頒ヂ、以テ裁斷ノ程度ヲ畫一セン。
 審判條例ノ如キモ、踵テ將ニ奏上スル所アラ
 ントス。之ヲ制可ス。原告條例、凡ソ二十三則、其
 目ニ曰ク、詞訟ヲ為ス者ハ、先ツ被告人ノ戶籍
 ヲ檢ス。曰ク差添人ヲ定ム。曰ク詞狀ノ要旨、曰
 ク貸付及ヒ寄託錢糧ノ訴、曰ク物品價金ノ訴、

曰ク豫約金ノ訴、曰ク保擔工事ノ訴、曰ク雇工
 人及ヒ工商肄業人違約ノ訴、曰ク專賣權ヲ犯
 スノ訴、曰ク商會ノ争訟、曰ク離婚及ヒ養子離
 異ノ訴、曰ク家督ノ訴、曰ク田畝山林ノ訴、曰ク
 疆界ノ争訟、曰ク詞狀ハ一事ニ止マル。曰ク詞
 狀ニ二事ヲ合ス。曰ク原告二人以上、及ヒ被告
 二人以上連及ノ詞狀、曰ク讓與証書ノ訴、曰ク
 代人ノ制、被告條例、凡ソ十三則、曰ク答辨書ノ
 要旨、曰ク差添人ヲ定ム。曰ク代人ノ制、曰ク解
 訟、曰ク假領票ヲ有ス。曰ク元告延期ノ約ニ違

フ。曰ク元告詐為ノ証票。曰ク経界ヲ争フ。曰ク未訴ノ事ヲ以テ。已訴ノ事ニ對フ。曰ク延期ヲ約ス。曰ク質對ノ猶豫ヲ請フ。曰ク親戚朋友ノ代償。別ニ詞狀及ヒ答狀書式十八款ヲ附ス。訴訟ノ程式粗備ハル。四月。藩債ヲ録シテ。公債ト為シ。舊知事及ヒ士族ノ家祿ヲ以テ。之ヲ抵償スルヲ止メ。且ツ其公廨費ヲ補辦スルヲ罷ム。五月。凡ソ人名。實名。通稱等。數稱アル者ハ。必ス一ニ從ハシメ。又私ニ姓名及ヒ鋪號ヲ改ムルヲ禁シ。事故アル者ハ稟請セシム。蓋シ詞訟ノ奸詐

旧幕府ノ貸付金ヲ拵指ス

身代限規則ヲ定ム

ヲ防クナリ。初メ朝貴及ヒ寺院ノ名稱ヲ冒シテ。金銀ヲ假貸セシ者ハ。彼此和辨シ。公裁ヲ仰クヲ許サス。是ニ至リ。令シテ其訴訟ヲ受理シ。舊幕府奉行代官所。貸與スル所ノ金穀。及ヒ日光上野金ト稱スル者ハ。一切之ヲ拵指ス。尋テ新聞發兌人ニ。訟廷ノ傍聽ヲ許シ。併テ推問始末ヲ刊載スルヲ許シ。以テ判理ノ公正ヲ示ス。六月。身代限規則ヲ定ム。其要ニ曰ク。身代限ノ裁断ヲ受ル者ハ。監定人及ヒ里正參同シ。家資器財ヲ競賣シ。價金ヲ裁判所ニ致シ。之ヲ各債

主ニ分付ス。其平民ニ在テハ、家口ニ照シ、時衣副衣各二領、卧具一襲、炊器一具、一月ノ食糧、及ヒ本人ノ職業ニ缺ク可ラサル器物ヲ給ス。華士族ニ係レハ、家祿、及ヒ冠服、雌雄刀ヲ留ム。餘ハ平民ニ同シ。乃チ其判文ヲ裁判所、及ヒ宅前ニ揭示シ。且ツ新聞紙ニ載セ。本人ニ関係アル者ハ、三十日内ニ告訴セシム。初メ金穀ノ争訟ヲ判スル。日ヲ限テ完償ヲ命シ。稱シテ日限濟方ト曰フ。期ニ及テ完セサレハ、始テ身代限ヲ為ス。是ニ至リ。判決ヲ為セハ、即チ身代限ヲ行

ハシム。明年、復々僧侶身代限規則ヲ定メ、佛堂、及ヒ寄附帳、什物帳ニ載スル物ヲ留ム。餘ハ通法ノ如シ。又地方貸付金穀ノ証書式ヲ定メ、區戸長、及ヒ人民ノ証書ニ、地方官ノ契照ヲ付ス。後七年ニ至リ。証書ヲ管廳ニ留メ、別ニ管廳ノ証書ヲ、大藏省ニ致サシム。蓋シ証券印紙發行以來、授受必ス本又ノ印ヲ要スルニ由ル。七月、印章ヲ他人ニ委付スルヲ禁シ。又婦女ノ戸主タル者ハ、公私ノ文票ニ其名印ヲ捺シ。以テ証据ニ備ヘシム。蓋シ詐為文書ノ源ヲ墜クナリ。

檢事ヲ置キ審判ノ当否ヲ監視シム

八月、司法職務定制ヲ定ム。乃チ裁判所ヲ分テ、司法省臨時裁判所、司法省裁判所、出張裁判所、府縣裁判所、各區裁判所ノ五種ト為シ、判事解部ヲ置キ、以テ争訟ヲ問究ス。更ニ檢事ヲ置キ、判理ノ當否ヲ監スルノ職ト為シ、必ス訟廷ニ連班セシム。否レハ裁判ヲ為スヲ許サス。凡ソ詞訟アル、檢事先ツ詞狀ヲ按シ、事情ヲ察シ、其意見ヲ判事解部ニ陳ス。孤弱婦女ノ訟ハ、殊ニ保庇ヲ加ヘ、貧富貴賤、平等ノ權利ヲ得セシメ、其冤枉アル者ハ、卿ニ報シテ覆審ヲ乞フヲ許

公証人代書人
代書人ヲ設ク

ス。又區戸長役所ニ、証書人ヲ置キ、田土家屋ノ賣買貸借、及ヒ贈遺等ノ締約書ニ証印シ、各地ニ代書人ヲ置キ、以テ詞狀ニ遺漏ナカラシメ、代書人ヲ置キ、代リテ事情ヲ陳ヘ、以テ冤枉ナカラシム。但代書代書人ノ用否ハ、本人ノ情願ニ任ス。是月、司法省諭シテ曰ク。訟ヲ聽クハ、曲直ヲ判シテ權利ヲ伸シムルニ在リ。諄々審問シテ、能ク其情ヲ盡サシム可シ。然ルニ之ヲ斷獄ト混シ、甚キハ笞杖ヲ加フルニ至ルト。自今、嚴ニ之ヲ禁ス。九月令ス。凡ソ訴訟、原告被告ヲ

大政紀要

問ハス。由ニ帰スル者、其費用ヲ償辦ス可シ。曰
テ証人干涉人ノ路費、及ヒ羈留日費、代書、通事、
翻譯等、費用ノ制ヲ立ツ。尋テ人民ノ官廳ヲ告
ルニ、事公務ニ係ル者ハ、官金ヲ以テ之ヲ償ヒ、
其原告ヨリ償フ者ハ、之ヲ大藏省ニ納レシム。
十月、金穀貸借、舊藩主士卒ニ干涉シ、其封土奉還
前ニ在ル者、及ヒ静岡、仙臺、會津等、再建諸藩ノ
未建前ニ在ル者、家祿ヲ抵當ト為ス者、又ハ條
約期月後、五年ニ至テ告訴セサル者ハ、並ニ受
理セサルコトヲ布告シ、又民庶ノ金穀貸借、戊

証券印紙ヲ發
行ス

辰以前ニ在ル者ハ、受理セサルコトヲ令ス。尋
テ地方官、及ヒ戸長等、措置、官令ニ悖リ、其他、請
願申稟ヲ壅閉スル者ハ、其地方裁判所、或ハ司
法省裁判所ニ直訴スルヲ許シ、猶ホ其判理ニ
服セサル者ハ、司法省ニ控訴スルヲ許ス。
六年二月、証券印紙ヲ發行シ、凡ソ貸借賣買等ノ
證券、必ス之ヲ貼セシム。否サレハ、告訴スト雖
モ受理セス。曰テ其規則ヲ頒テ、六月一日以後
之ヲ行フ。五月、是ヨリ先、大藏省、吏ヲ派シテ舊
藩債ヲ檢核ス。藩吏、舊主ニ私シテ、財主ト謀リ、

上告實ナラサル者アリ。既ニシテ皆自訴ス。特ニ其罪ヲ問ハス。封建ノ餘習。其情憫ム可キヲ以テナリ。是月。夫婦諧カス。婦、離異ヲ求メ。夫肯セサル者ハ。其父兄親戚ト。俱ニ告訴スルヲ許ス。六月令ス。凡ソ貸借賣買等。十圓以上ハ。必ス証券及^{カケトリ}レ領票ヲ交換セヨ。又金穀貸借ノ^{保人}証人代償ノ制限ヲ更定シ。必ス証券ニ責任ノ事由ヲ記セシム。是月令ス。内外國人。交渉ノ詞訟ハ。司法省之ヲ判理スト。雖モ。外國政府。及ヒ其士民。我政府ニ對スル詞訟ハ。自今。外務省之

外国人訴訟規則ヲ定ム

ヲ審理ス。曰テ現ニ各裁判所。及^レ府縣ニ於テ。受理スル所ノ者。悉ク外務省ニ交付セヨト。明年九月ニ至リ。復々之ヲ司法省ニ屬ス。尋テ外國人訴訟規則ヲ創定シ。外國人ノ我人民ニ對シテ訴訟ヲ為ス者ハ。此規則ヲ遵守セシメ。内外交渉ノ貸借ハ。証拠ノ有無ヲ論セス。之ヲ受理セシム。又令シテ曰ク。凡ソ金銀貸借証券ノ類。私事ノ文書ニ。官名ヲ署シ。若クハ官名印ヲ捺シ。及ヒ爪印華押ヲ用フルヲ禁シ。必ス^{デット}名印ヲ踏セシム。但シ賣買証券ニ。商用印ヲ用ヒ。領

渾田曆ニ塵印ヲ押スハ此令ト在ラス其公私
 ノ文書七月十日以後總テ年號月日ヲ具ヒシ
 ノ其一ヲ闕ク者ハ証左ト為スヲ得サラシム
 後八年ニ至リ獨リ年月日ノ事ニ止リ其詞訟
 ヲ受理セサルニ非サルコトヲ申令ス又諸道
 ノ助役及ヒ驛費ニ干涉ノ欠負丁卯十二月以
 前ニ係ル者ハ告訴スト雖モ受理セサルコト
 ヲ布告ス七月訴答文例ヲ定ム凡ソ十二章五
 十條附スルニ書式十八款ヲ以テス蓋シ去年
 頒ツ所ノ聽訟規則ヲ修改シ大ニ周密ヲ加フ

新答文例ヲ頒
 ツ

越訴律ヲ刪ル

ル者トス別ニ成書アリ今詳記セス八月訴訟
 律ヲ越訴條ヲ刪ル其裁判所及ヒ地方官ノ判
 理ニ服セサル者ハ曩ニ頒ツ所ノ控訴條規ニ
 據テ告訴ヲ聽スヲ以テナリ又動産靜産典當
 規則ヲ定メ典當期內ニ流出燒失シ及ヒ期ニ
 及テ取贖セサル者ハ並ニ身代限法ニ據ル九
 月初メ京都府民小野善助東京ニ轉籍セント
 請フ府許サス善助之ヲ裁判所ニ訴フ裁判所
 判シテ府ヲ以テ非理ト為ス府服セス司法省
 ニ控訴ス是月臨時裁判所ヲ開キ陪審官ヲ設

出訴期限ヲ定

ケテ之ヲ判ス。十月、府縣判任官ノ職掌ヲ改定
 シテ、四課ト為シ、聽訟課、其一ニ居リ、大屬以下、
 之ヲ分掌ス。十一月、金穀貸借ノ出訴期限ヲ定
 ノ。事ノ輕重ニ依リテ、六月、一年、五年ノ三期ト
 為シ、其期ヲ過クレハ、自ラ告訴ノ權ヲ失フ者
 ト為ス、夫レ期ヲ過キテ、猶ホ展限ヲ與ヘ、敢テ
 遽ニ告訴セサルハ、人情ノ厚ニ出ツト雖モ、徒
 ニ年所ヲ経テ、之ヲ訴ル時ハ、元告、被論、保者、証
 人、或ハ死亡シ、或ハ轉徙シ、事理曖昧、為メニ判
 理ノ難疑ヲ來タス、是レ此令アル所以ナリ、是

月、裁判所及ヒ府縣ニ令シ、月次聽訟件數ヲ彙
 録シテ、司法卿ニ上ラシメ、又訴訟判決ノ服辦
 ヲ廢シ、判文ニ廳印ヲ踏シテ、原被両造ニ下付
 ス。十二月、敕奏官華族、及ヒ有位者ト雖モ、民法
 裁判ニ係ル者ハ、直ニ本人ヲ召シテ推問スル
 ヲ許ス、後テ十年ニ至テ、刑事ト同ク、奏請シテ
 後ニ推問セシム、蓋シ法制局ノ建議ニ出ツ、尋
 テ司法裁判所ノ判理ニ服セサル者ハ、本省ニ
 控訴スルヲ許ス、司法裁判所ハ、諸裁判所ノ上
 ニ位ス、其判理ニ服セサル者ハ、控訴ノ道ナシ、

故ニ此令アルナリ。其判ス可キ者ハ、臨時、局ヲ
開キ、司法卿自ラ之ヲ覆審ス。

七年一月、各廳ニ令シ、金穀收納証書中、數量等ヲ
塗抹改削スルヲ禁ス。其已ムヲ得サル者ハ、字
傍ニ朱注シ、主掌者ヲシテ捺印セシム。後テ簿
冊証票ニ、金穀物品ノ數量ヲ記スル、必ス壹貳
拾ノ字ヲ用ヒシム。公式令ヲ案スルニ、簿帳、科
罪、計賑、過所、抄榜ノ類、數アル者ハ、大字ニ為
レト。大字ハ、即テ壹貳叁肆等ノ多畫字ニシテ、
蓋シ古ノ制ナリ。尋テ証書ノ數紙ヲ累スル者

控訴畧則ヲ頒

ハ、其釘所及ヒ紙縫ニ捺印シ、以テ他日ノ勘査
ニ備ヘシム。三月、凡ソ付托金穀、其証券ニ開封
セス、及ヒ使用セサル、ノ明文ナキ者ハ、尋常貸
借ヲ以テ、其訴訟ヲ判理スルヲ布告ス。五月、民
事控訴畧則ヲ頒ツ。蓋シ五年十一月ノ令ヲ擴
張スルナリ。畧ニ曰ク、凡ソ詞訟、裁判所若クハ
地方官ノ判断ニ服セス。以テ不理ト為ス者ハ、
司法省裁判所ニ控訴シ、司法省裁判所ノ始審
ニ係ル者ハ、臨時裁判所ニ控訴スルヲ許ス。其
控訴ヲ為ス者ハ、三月内ニ、控訴狀ヲ其廳ニ呈

官民對訟規則
ヲ定ム

セシム。裁判所府縣ハ。即判文ノ外、更ニ不理状
ヲ與ヘ。次ヲ以テ上陳セシム。明年大審院上等
裁判所ヲ置クニ及テ。更ニ控訴條規ヲ頒ツ。控
訴ノ法。是ニ至テ大成ス。六月。官府人民對訟假
規則ヲ定メ。稱シテ行政裁判ト曰フ。其事ノ公
共ニ関スル者ハ。司法省其告ヲ受ケ。先ツ太政
官ニ具狀シテ旨ヲ請フ。事ノ公共ニ関ラサル
者ハ。司法省之ヲ判理ス。奏任以上ニ涉ル者ハ
奏請ス。七月。裁判所及ヒ縣廳ニ令ス。凡ソ詞訟
ノ証據書類ハ。其用否ヲ問ハス。本紙ニ年月日

及ヒ番號ヲ記シ。判事、令、參事某觀ト書シ。名下
ニ印シテ。他日判理ノ証憑ト為サシム。九月。是
ヨリ先。控訴ヲ許ス。是ニ至テ。其終審始審ノ權
限ヲ定メテ曰ク。民庶ノ争訟。及ヒ官府ノ民庶
ニ對スル者ハ。地方裁判所始審ノ判理ヲ為シ。
司法裁判所終審ノ判理ヲ為ス。民庶ノ官府ニ
對スル者。及ヒ官府ノ地方裁判所ニ對シ。地方
裁判所ノ民庶ニ對シ。若クハ舊藩債ニ関スル
者ハ。司法裁判所始審ヲ為シ。臨時裁判所終審
ヲ為ス。

大審院ヲ置キ
上等裁判所ヲ
設ケ控訴上告
ノ條規ヲ頒ツ

八年一月。負債者失踪後ノ訴訟條規ヲ更定ス。舊制。失踪後。三十六月ヲ経サレハ。告訴ヲ受理セズ。是ニ至テ。貸借ノ期滿ツレハ。即チ訴フルヲ許ス。二月。民庶及ヒ外國人ニ。訴訟審判ノ傍聴ヲ許ス。是月。外務省。各國公使ト議シ。彼我士民詞訟ノ程度ヲ定ム。我國民ニ對スル者ハ。其領事ヲ經由シテ。我裁判所ニ告訴シ。外國人ニ對スル者ハ。本管ノ府縣ヲ經由シテ。彼領事官ニ告訴ス。四月。大審院ヲ置ク。尋テ司法裁判所ヲ廢シテ。上等裁判所ヲ。東京、大坂、長崎、福島ニ置

キ。府縣裁判所ノ判決ニ服セスシテ。控訴スル者ヲ覆審ス。乃チ控訴上告ノ條規ヲ定メ。民事控訴略則ヲ廢ス。事詞訟ニ屬スル者。凡ソ二十七條。畧ニ曰ク。初審ニ服セスシテ。覆審ヲ上等裁判所ニ請フ者。之ヲ控訴ト曰フ。控訴ハ。民事ニ止リ。刑事ニ及ボサズ。控訴スル者ハ。裁決後。七日内ニ。裁判所ノ添書ヲ請ヒ。控訴狀ヲ上等裁判所ニ呈ス可シ。三月ヲ過クル者ハ。控訴ノ權ヲ失フ。猶ホ其終審ニ服セスシテ。大審院ニ訴ル者。之ヲ上告ト曰フ。聽斷定規ニ背キ。判理

法律ニ違ヒ。若クハ管理ノ權ヲ踰ル者。皆上告ヲ許ス。二月ヲ過クル者ハ。又上告ノ權ヲ失フ。北海道ハ。定則之ヲ律シ難キヲ以テ。別ニ其假規則ヲ設ク。六月。裁判事務心得ヲ定ム。曰ク訟獄疑難ニ涉ルト雖モ。裁判ヲ中止シテ。上司ニ稟議スルヲ許サス。判理ニ服セスト雖モ。辨解ヲ為スヲ要セス。法ニ據テ控訴上告ヲ為サシム。凡ソ詞訟。成法ナキ者ハ。習慣ニ依リ。習慣ナキ者ハ。條理ヲ推シテ判理ス。故ニ判文ヲ以テ。將來ニ例行スルヲ得ス。九月。東京裁判所。支廳

勸解裁判所ヲ置ク

ヲ府下巴町、富士見町、二長町、築地、本所ノ五所ニ置キ。專ラ詞訟ヲ勸解ス。凡ソ民事ニ屬スル者ハ。事ノ輕重。金ノ多寡ヲ論セス。之ヲ勸諭和解ス。判決ノ權。民事ハ金額百圓。刑事ハ懲役三十日ヲ限ト為ス。後之ヲ各府縣ニ設ク。是月。家屋典當。及ヒ賣買讓與規則十九條ヲ定メ。其証書及ヒ繪圖ニ。戸長ノ公証ヲ受ケシメ。以テ重典賣等ノ詐欺ヲ檢査ス。十月。司法省。各裁判所ニ令シテ曰ク。聽訟ニ関スル法令。已定未定ニ論ナク。其缺漏ヲ裨補シ。新定ヲ要スル者ハ。實

訴訟罪紙ヲ行ス

地ノ得失、緩急ノ程度ヲ商量シ、漸次案ヲ具シテ、上裁ヲ取ラント欲ス。苟モ意見アル者、随時本省ニ具申セヨト。十二月、訴訟用罪紙ヲ發行シ、其規則ヲ定メ、様本ヲ頒ツ。凡ソ争訟ヲ生シ、官裁ヲ仰ク者ハ、訴状、答書、及ヒ証據文票ノ謄本等、一切此罪紙ニ寫サシム。罪ハ一紙ヲ十六行ニ格シ、青、黄、紅、緑、黒、紫、楮、橙、黄、黄、緑、ノ九種ト為シ、土地、金穀、家屋、人事等、其事ニ從テ其色ヲ別ツ。因テ取贖所ヲ定メ、偽造スル者ハ、其物ヲ没シ、九十圓以下ノ科料ヲ徴ス。

ル 代 言 人 規 則 成

九年一月、上等裁判所ニ令シテ、民庶ノ官司ニ對スル詞訟ハ、先ツ司法省ニ稟告シテ、後ニ受理セシム。蓋シ行政裁判、司法裁判ノ権限、混淆ヲ免レサルヲ以テナリ。尋テ代言人規則ヲ創ス。凡ソ代言人タラント欲スル者ハ、區戸長ヲ經テ、本管官司ノ點檢ヲ乞ヒ、具狀書ヲ得テ、司法省ニ詣リ、免許狀ヲ請ケシム。已ニ許可ヲ得タル者、其規則ヲ犯セハ、罰スルニ、譴責、停業、除名ヲ以テシ。其請願ノ期ヲ定メテ、三月九月ノ兩次ト為ス。二月、裁判所、及ヒ諸縣ニ令シ、民事詞

訟ノ緣由書。及ヒ口供判文等。年號月日ヲ正記
 シ。本年、去月、翌日等ノ字ヲ用フル勿ラシム。五
 月、琉球藩ノ裁判事務ヲ、内務省ニ屬ス。是月、令
 ス。華族ノ契券証書等。往々家令家扶。若クハ其
 家等ノ名印ヲ用フル者アリ。自今、本主ノ名印
 ヲ署ス可シ。否レハ以テ証左ト為スヲ得ス。又
 金ヲ皇族ニ貸シ。未タ公債ニ入ラサル者ハ。本
 年八月ヲ限リ。大藏省ニ申セシム。七月令シテ。
 金穀貸借証券。債主之ヲ他人ニ與フレハ。借主
 ヲシテ其券ヲ改作セシム。否サレハ。讓與ノ証

訴訟法ヲ草ビ
 シム

書アルモ。其効ナシ。但相續人ニ讓與スルハ。此
 限ニ在ラス。九月。府縣裁判所ヲ廢シテ。地方裁
 判所ト為シ。其支廳ヲ置キ。勸解支廳ヲ改メテ。
 區裁判所ト稱ス。是月。元老院ニ命シテ。訴訟法
 ヲ草ビシム。司法省上疏シテ曰ク。法律ノ改正
 ス可キ者。一ニシテ足ラス。向ニ奏可ヲ得テ。刑
 法治罪法ヲ起草ス。然ルニ民法ナル者ハ。人民
 ノ條規ニシテ。其用最モ大ナリ。我國ノ民事ヲ
 裁判スル。天理ニ合フ者。少カラスト雖モ。法ニ
 明文ナク。律ニ成例ナシ。維新以來。法律ヲ創成

スル。多クハ一弊ヲ除キ、一害ヲ防クニ出ツ。故
ニ此ニ一賢ヲ塞ケハ、彼ニ數賢ヲ生シ、其弊ヤ。
人民法律ヲ以テ其私ヲ掩ヒ、其奸ヲ逞スル者
アリ。今ノ時ニ方リテ、完成ノ民法ヲ創立シ、以
テ之ヲ統裁スルニ非サレハ、殆ト人類ノ交義
ヲ滅スルニ至シ。所謂完成ノ民法トハ、天然ノ
性理ニ基キ、夫婦父子ノ權義ヲ明ニシ、結婚、離
異、繼嗣ノ制、後見人、管財人ノ法、契約、授受、賣買
ノ條則等、鉅細遺サズ、之カ制ヲ立ルニ在リ。其
効用タル、人道ノ大節ヲ守リ、權理ノ犯ス可ラ

サルヲ知リ、一家ノ經濟ヨリ、一國ノ富彊ヲ生
シ、家庭ノ輯睦ヨリ、邦家ノ安寧ニ及ホサント
ス。我邦、生産ノ増殖セサルハ、相續法ノ立タサ
ルニ由ル。夫婦ノ協和セサルハ、結婚離婚ノ法
ナキカ為ニシテ、孤兒寡婦ノ財ヲ掠奪セラレ
ルハ、後見人ノ制ナキヲ以テナリ。物貨融通ノ
壅滯スルハ、契約法ノ備ハラサルカ故ニシテ。
家庭ノ齊整セサルハ、夫婦父子、權義ノ制ナキ
ニ由ル。其原委ヲ繹ヌレハ、一ニ民法ノ完成ナ
ラサルニ歸ス。是ヲ以テ、本年三月以來、僚員ニ

命シテ民法ヲ草セシメ、已ニ百餘條ヲ成セリ。夫レ民法アリ、亦商法ナカル可ラス、而シテ我國、商事ニ関スルノ規則方法ハ、最モ其不備ヲ極ム、宜ク亟ニ講究討議シテ、其成典ヲ編集セサル一カラス、亦委員ニ之ヲ起草セシム、將ニ一部成ル毎ニ、進奏スル所アラントス、後テ十年、其事ヲ太政官ニ屬シ、尋テ參事院ヲ建ルニ及テ、商法ヲ法制部ニ屬シ、民法ヲ元老院ニ付ス。

十年一月、舊制、付託金穀ノ訴訟、其証券ニ開封セ

ス、及ヒ使用セサルノ明文アル者ハ、年数ヲ問ハス之ヲ受理ス、是ニ至リ、本年ヨリ二十年前ニ係ル者ハ、受理セス、二月、控訴上告ノ條規ヲ釐正ス、三月、船舶ヲ買賣シ、若クハ抵當ト為ス者ハ、家屋典當賣買規則ニ據リ、船圖及ヒ約定書ニ、戸長ノ公証ヲ受ケシム、否サル者ハ、尋常借貸ヲ以テ之ヲ起ス、又財産同居親屬、及ヒ同籍子弟ノ有タル公証アル者ハ、戸主身代限ノ抵償ニ加ヘス、貸付金、亡妻ノ有ニ係ル者ハ、其子ニ給ス、五月、物品價金延滞ノ訴訟、其帳簿ニ

逋者ノ印証ナキ者。及ヒ金穀貸借証券ニ。拇印
花押ヲ用ル者ハ。以テ証據ト為スヲ得サルノ
制ヲ改メテ。並ニ之ヲ受理ス可キヲ令ス。是ヨ
リ先。金穀ヲ貸借スル。証券ナシト雖モ。本人手
署自筆ノ文書アリテ。事實ヲ徴スルニ足ル者
アレハ。受理裁判ス可キヲ令スルニ因テナリ。
尋テ令ス。凡ソ証書ハ。必ス自書捺印ス可シ。其
代書ヲ用フル者ハ。書手ノ姓名事由ヲ傍記シ
テ捺印ス可シ。七月。凡ソ詞訟ノ上告シテ。已ニ
裁判ヲ經ル者ト雖モ。司法卿。其裁判ヲ以テ。先

關席裁判ノ制ヲ
議セシム

附屬代言人ヲ
司法省ニ置ク

當ナラスト為ス者ハ。檢事ニ命シテ。再審ヲ求
メシム。八月。司法省。契約証書ヲ解釋スルノ要
旨十四款ヲ定メテ。各裁判所ニ頒テ。以テ判理
ニ冤枉ナカラシム。十一月。司法省ニ命シ。身代
限法ヲ更正シテ。財産勾収サシオリノ法。及ヒ關席裁判
ノ制ヲ議草セシム。蓋シ内外交渉ノ詞訟ニ。我
奸民。財産ヲ欺隱シ。或ハ逃匿跡ヲ晦マス者多
キヲ以テナリ。十二月。司法省ニ。附屬代言人ヲ
置キ。臨時。司法卿ノ命ヲ受ケ。各裁判所ニ至リ。
諸官衙ノ代言ヲ為シ。又人民ノ囑ニ應シ。貧者

ハ謝金ヲ受ケス。後テ十四年ニ至テ。之ヲ廢ス。
十一年七月。租税未納者ノ身代限ヲ為ス。財産ヲ
公賣シテ。先ツ租税ヲ徵收シ。剩餘ヲ以テ裁判
費ニ充ツ。十月。司法省令ス。凡ソ終審ノ裁判ヲ
經ルノ後。詐欺ノ証跡ヲ發見スレハ。其判理ヲ
以テ。無効ト為サシム。是月。小笠原島ノ裁判ヲ
内務省ニ屬シ。書記官小花作助ニ。判事ノ事ヲ
行ハシム。

十二年四月。琉球藩ヲ廢シテ。沖繩縣ヲ置キ。從五
位鍋島直彬ヲ以テ令ト為シ。五等判事ヲ兼ネ。

訟獄ヲ聽斷セシム。五月。法學士ノ號ヲ有スル
者ハ。試験ヲ須ヒスシテ。代言人免許狀ヲ付與
ス。是ヨリ先。東京大學ニ。法學部ヲ設ケ。生員ヲ
置キ。内外古今ノ法律ヲ講究セシム。故ニ此制
ヲ定ムルナリ。六月。大審院ニ令シテ曰ク。人民
ノ官府ニ對スル詞訟。上等裁判所ノ判理ニ服
セスシテ。上告スル者ハ。其受理不受理ヲ。先ツ
司法省ニ稟告セシム。七月。司法省令ス。凡ソ審
判ニ因テ。偽証或ハ詐為ノ文書ナルヲ判別ス
ル者。已ニ判決ヲ經レハ。其文書ヲ沒收ス可シ

ト雖モ、若シ謄寫ヲ請フ者アレハ、之ヲ許シ、他日ノ証憑ト為サシム。十月、司法省、民事綜計表ヲ上ル。

十三年二月、司法省諭ス。凡ソ二人以上、共借ノ証券、各自分借ノ数目ヲ載セスシテ、連署人ノ内、失踪死亡者アレハ、其現在人ニ償還セシム。三月、舊琉球藩債償還方、及ヒ貸付金穀収入法ヲ定ム。藩債、弘化元年以後ニ係ル者ハ、録シテ公債ト為シ、現金ヲ以テ一時ニ之ヲ償フ。天保十四年以前ニ係ル者ハ、録セス。貸付金穀、及ヒ各

項ノ未納物ハ、舊藩ノ約束ニ從テ徴シ。天保十四年以前ニ係ル者ハ、一切棄捐ス。是月、太政官ニ六部ヲ置キ、司法部ヲシテ、行政裁判、其他司法事務ヲ査理セシム。四月、代言人規則ヲ更正ス。司法省ノ疏ニ曰ク、嚮ニ代言人規則ヲ頒テ、相尋テ其節目ヲ修補スト雖モ、未タ完備ニ至ラス。是ヲ以テ、代言人、或ハ本分ノ旨ニ悖リ、私利ヲ圖ル者アリ。曰テ規則ヲ更正シ、檢束ノ法ヲ設ケ、檢事之ヲ監督シ、代言組合ヲ定メ、互ニ品行ヲ淬勵セシメハ、風習自ラ改良ニ赴カン。

尋テ代人ノ制ヲ定ム。曰ク元告被告。若クハ干
係人。疾病事故アル者。代言人ナク。又ハ代言人
ニ託シ難キ者ハ。區戸長ノ公証ヲ得。親戚知友
ヲ以テ。代人ト為スヲ許ス。但代人ハ一事ニ限
ル。若シ二事以上ヲ包攬シ。或ハ詞訟ヲ教唆シ
テ。私利ヲ圖ル者ハ。直ニ其代人ヲ停止ス。六月。
海軍省。海上裁判所訴訟規則。及ヒ聽訟規則草
案ヲ上ル。乃チ審査局ヲ元老院ニ置キ。副議長
佐々木高行ヲ以テ。總裁ヲ兼ネシム。十一月ニ
至リ。修正功ヲ竣ヘテ奏上ス。十一月。初メ宗教

ニ関スル争訟ハ。教部省ニ委シテ判理セシメ。
省ヲ廢スルニ及テ。之ヲ司法省ニ屬ス。是ニ至
リ。事宗教ニ関スル者ハ。受理セサラシム。蓋シ
衆庶ノ權理ヲ争フ者ト。同カラサルヲ以テナ
リ。又土地賣買讓與規則ヲ定メ。従前ノ規則ヲ
廢ス。其畧ニ曰ク。凡ソ土地ヲ賣却シ。讓與スル
者ハ。其証書ニ地券ヲ添ヘ。戸長ノ公証^{オクガキ}勘合^{クワイン}ヲ
受ケ。之ヲ買者與者ニ付ス可シ。買取人讓受人。
已ニ証票ヲ受クレハ。地券ニ。彼我連署ノ陰書^{ウラガキ}
顔状ヲ添ヘ。戸長ヲ經由シテ。本管ノ官司ニ呈

ス可シ。死亡失踪ノ後ヲ承ケ、遺産ヲ襲有スル者ハ、親族鄰佑ノ連署ヲ以テ上陳スル。亦之ニ準ス。君シ授受ノ後、六月以内ニ、戸長ニ稟告セサル者ハ、並ニ証印税五倍ノ科料ヲ命ス。

十四年一月、吟味願ト称スル訴状ヲ廢ス。司法省ノ議ニ曰ク、契約ノ疎漏ヨリ、自ラ權利ヲ失ヒ、往々名ヲ告訴ニ假リ、以テ官裁ヲ請フ者アリ。俗ニ吟味願ト稱ス。大抵、証憑備ラス、却下ニ止ル。往日ニ在テハ、因テ被害者ノ權利ヲ伸ヘ、檢事モ亦曰テ奸匪ヲ知ルヲ得タリ。今日ニ在テ

審理局ヲ太政官ニ置ク

ハ、糾問判事、檢事、監察官ニ訴フルヲ得可ケレハ、所謂吟味願ノ效ヲ見ス。請フ之ヲ廢セント。司法省又令シテ曰ク、詞訟審判ノ事ニ係リ、歎願又ハ、再審願ト稱シ、往々書ヲ本省ニ呈スル者アリ。事法律ニ悖ル。自今之ヲ禁スト。二月、審理局ヲ太政官ニ置キ、事務順序ヲ定ム。凡ソ府縣會規則ニ据リ、府知事縣令、及ヒ府縣會員ヨリ、具狀シテ裁定ヲ請フコトアレハ、臨時參議一人、議官二人、大審院判事二人、太政官書記官二人ヲ特選シテ、審理官ト為シ、之ヲ裁定ス。六

月。司法省、府縣ニ令ス。詞訟審判ニ當リ、府縣、及
郡區役所、戸長役場、帳簿ノ抄録ヲ要スル者
ハ、其裁判所ヨリ囑託ス可シ。乃チ抄本ニ、各廳
及郡區役所、印章ヲ捺シテ送付スヘシト。
其費用ハ、裁判所之ヲ辦ス。七月、郡區戸長ノ職
事ニ對スル詞訟ハ、上等裁判所之ヲ判スルノ
制ヲ改メ、地方裁判所ニ委シテ判理セシム。因
テ之ニ關スル、従前ノ布令ヲ繳回ス。九月、地名
ヲ妄改スルヲ禁ス。蓋シ地名ハ、古來ノ稱ヲ襲
フ者ニシテ、争訟ノ判理ニ用アルヲ以テナリ。

裁判所ノ權限
ヲ定ム

十月、小笠原島ノ詞訟ヲ、東京府出張所ニ委シ、
控訴スル者ハ、東京控訴裁判所ニ屬ス。又伊豆
七島ノ裁判ヲ、假ニ島吏ニ屬シ、百圓以下ノ詞
訟ヲ判セシメ、控訴スル者ハ、小笠原島ノ如シ、
是月、參事院ヲ太政官ニ置キ、課ヲ分テ六部ト
為シ、民法、訴訟法、商法等ヲ、法制部ニ屬シ、裁判
ノ章程、及行政裁判ノ事ヲ、司法部ニ屬シ、審
理局ヲ廢シテ、其事ヲ參事院ニ屬ス。十二月、治
安裁判所、及郡區審判所ノ權限ヲ定ム。治安
廳ハ、詞訟ノ勸解ヲ掌ル、但官廳ニ對スル者、及

民事ニ與カラス。其百圓未滿ノ争訟ヲ始審
 シ。人事其他金額ニ算ス可ラサル者ハ。裁判ノ
 權ナシ。始審廳ハ。百圓以上ノ争訟ヲ始審シ。管
 下ノ治安廳ノ始審ニ服セサル者ヲ終審ス。
 十五年十月。民事訴訟表式。及ヒ記載例ヲ定ム。十
 二月。土地家屋船舶ノ賣買讓與抵當等ノ公証
 ヲ請フニ方リ。本主ニ對シテ。既ニ詞訟ヲ起ス
 者ハ。公証ヲ停メテ。判決ノ日ヲ待タシム。是月。
 東京府下。日本橋、本郷、四谷、淺草、品川ノ治安裁
 判所ヲ廢ス。

茲ニ明治十一年ノ詞訟ヲ檢覈スルニ。大審
 院ニ四百八十三。上等裁判所ニ三千二百七
 十八。地方裁判所ニ四萬四千五百八十八。其
 枝廳ニ三萬九千九百十二。區裁判所ニ七萬
 七千四百三。勸解ニ係ル者。六十六萬四千八
 百九十六。統計八十三萬零五百六十宗。何ソ
 其多キナリ。維新以降。控訴上告ノ路ヲ開キ。
 務メテ斯民ヲシテ。吞冤誣服ニ免レシメン
 トス。其詞訟ノ多キニ視テ。以テ衆庶權利ノ
 伸張ヲトス可シ。所謂行政裁判ノ如キ。八年ニ

カ
政
綱
要

終

在テハ、僅ニ二事ニ過サルモ、十五年ニ在テ
ハ、六百六十三件ノ多キニ至ルト云フ。政道
ノ公明ナル、亦以テ槩見ス可シ。